第36回「近世城郭の天守群」の世界文化遺産登録を目指して（2）―調査研究の継続と成果の発信

（松江城・史料調査課松江城係長／木下誠／2023 年 7 月 11 日記）

国宝指定後も続く調査研究

【写真 1】『論集　松江城（1）』A4 判 298 頁、定価 3,500 円（税別）

国の文化審議会は、令和 3 年（2021）3 月 30 日に「我が国における世界文化遺産の今後の在り方」に関する第一次答申をとりまとめました。この答申では、日本から将来世界遺産一覧表に記載する計画のある物件を掲げた暫定一覧表の改定の必要性について言及しており、とりわけその点が注目されていますが、文化遺産の価値の深化へと繋ぐことができる学術的な調査研究の継続についても触れています。

松江市では平成 22 年（2010）5 月に松江城調査研究委員会を設置し、この委員会を中心とした調査研究の成果により松江城天守の国宝指定が実現しました。国宝指定後は調査対象を建築物の天守だけでなく、城郭や城下町にまで広げて継続的に調査研究を行っています。これら国宝指定後も進展した調査研究成果を全国に発信するため、令和 5 年（2023）1 月に『論集　松江城（1）』【写真 1】を刊行しました。

このように松江城では平成 27 年（2015）7 月 8 日の天守の国宝指定以降も調査研究が継続して行われており、最近も様々な調査成果が明らかになっています。

松江城本丸の発掘調査

平成 31 年（2019）4 月のノートルダム大聖堂、同年 10 月の首里城跡の火災被害を受けて、文化庁は「世界遺産・国宝等における防火対策 5 か年計画」を策定して計画期間中における重点的・計画的な文化財の防火対策を進めており、松江城天守でも防災施設整備事業に取り組んでいます。

この整備事業に伴い、令和 5 年（2023）4 月から松江城の本丸で発掘調査が行われました。限られた調査範囲ですが、本丸が発掘調査される数少ない機会です。

天守北側で防火用の送水管を配管する予定箇所では、地表から深さ 30～60 センチメートル付近で砕いた瓦を敷き詰めた遺構が出土し、松江城を築城した松江藩主・堀尾氏の家紋である「分銅文」をあしらった瓦【写真 2】が 3 点発見されました。これまで城内から確認されている「分銅文」を文様とする瓦【写真 3】は 2 点のみであり、今回のように天守近くで複数見つかったことは貴重な成果となりました。

【写真 2】松江城本丸の天守北側から出土した瓦敷き遺構（右）と分銅文の瓦（左）

【写真 3】分銅文の棟込瓦（松江城二之丸太鼓櫓跡西方土坑出土）

機会を捉えた調査研究成果の発信

【写真 4】速報展示「松江城調査の最前線」（松江城天守 2 階）

この成果は発掘調査を担当した松江市の埋蔵文化財調査課が 6 月 14 日に報道機関へ公開し、地元の新聞やテレビで報道されました。さらに、天守の国宝指定 8 周年となる 7 月 8 日から「松江城調査の最前線」と題して分銅文の瓦など出土品の一部を松江城天守で速報展示【写真 4】して、多くの人へ最新の調査成果を知っていただく機会としました。

2 年後には松江城天守の国宝指定 10 周年という大きな節目を迎えます。調査研究の継続とともに、その成果をわかりやすく伝える情報発信に今後とも取り組みたいと思います。